

チャレンジ講座（文系第2回）を実施しました

6月6日（水）に今年度3回目となるチャレンジ講座が実施されました。

本学福祉健康科学部の廣野俊輔先生を講師に迎え、「障がい者福祉への招待」というテーマで行われました。

遠隔配信された中津南、高田、国東、臼杵、大分西、安心院、竹田、三重総合、大分雄城台、別府翔青、大分商業及び来学の佐伯豊南、大分東明の計13校278名が受講しました。

廣野先生はまず、自己紹介の中で、自分の経験から障がいについて考えるようになった経緯をお話しされました。そして『『障がい』とは何だろう？』と問いかけ、障がい者基本法における「障がい者」の定義から身体障がい、知的障がい、精神障がい、発達障がいの4

つがあること、また、個人の疾病や変調だけでなく、障がいが起こる社会の環境にはどのようなものがあるかについても説明されました（障がいの社会モデル）。次にそれぞれの障がいについての説明を行い、身体障がいは、視覚障がいや聴覚障がい、肢体不自由、外見からはわかりづらい内部障がい（臓器障がい）について、知的障がいは、IQによる判定基準の説明、精神障がいは、うつ病の発症などについて、発達障がいは、脳

のはたらきの偏りや変調であると考えられることなどについて説明されました。さらに障がい者の数についてお話しされ、年を取ってから障がいをもつこともあり、今後1割程度の方が障がいを持つ時代が来るということでした。最後に障がい者に対する福祉のお話として、お金のこと、介助（暮らすうえでのお手伝い）のこと、働くことや働くための練習のことを説明されました。ジョイフルやキャノンなど大分県にある特例子会社の例を挙げるなど興味深い内容でした。最後に障がい者の生活を便利にする道具として白杖を実際に見せ、「白杖で避けられないものは何」と受講生を指名して質問しながら使い方の説明をしました。また音が鳴るボールやマス目や石に凹凸のあるオセロ盤、クレジットカード使用時のサインを書くための枠のついた紙幣の大きさを図るスケール、スケ

ジュールをわかりやすく伝えるための絵カードなどの実物を示し、受講生は興味深く話に聞き入っていました。明るくテンポの良い話であったという間の一時間でした。

講義後のアンケート調査では、「総合的に判断して授業がよかった」（100%「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」の合計。以下同じ）、「教員は真剣に取り組んでいた」（100%）、

「受講生は授業に意欲的に取り組んでいた」（100%）という結果

でした。遠隔配信については、「音声はよく聞こえた」（96%）、「映像はよく見えた」（97%）という結果が出ました。受講生の主な感想として、「福祉への意識が少し変わったと思う」「学び甲斐のある内容だった」といったものが寄せられました。

